

ローマの俳優（下）

フィリップ・マツシンジャー 作
山田英教 訳

登場人物

ドミティアヌス帝

パリス 悲劇俳優

パルティニウス 皇帝に仕える奴隷あがりの側近

エリウス・ラミア

ステイファノス

ユニウス・ラステイクス

アレティヌス・クリメンヌス 皇帝の腹心の司法官

エソプス 俳優

フィラゲウス 富裕な守銭奴

パルフィリウス・スラ 元老院議員

フルシイニウス 元老院議員

ラティヌス 俳優

アスクレタリオ 星占い師

セジェイウス

エンテイリウス

陰謀を企む男

ドミティア ラミアの妻

ドミテイラ 皇帝の従妹

ユリア テイトウス帝（皇帝の兄）の娘

カエニイス ウ斯巴シアヌス帝（皇帝の父）の愛

人

三人の護民官

二人のリクトル（先駆け役人）

百人隊長、士官たち、兵士たち、見張りたち、

捕虜たち、絞首刑執行人たち、召使いたち

第三幕

第一場

ユリア、ドミテイラ、ステイファノス登場。

ユリア ドミテイラ、それは違う。わたしの苦しみとあなたが受けたとおっしゃる侮辱、二つをくらべれば、そちらの傷がいかに大きくかろうと、この胸の痛みとは、オリンポスの山と土籠もくろの穴のようなものなのだから。

ドミテイラ ご自分の傷口をなめるお気持ちは強くても他人の傷の痛みはおわかりにならないのね。世の指弾インゼストものかは、陛下が公言なすつてはばからぬあなたとの近親相姦インゼスト、でもあれにはいささか酌量の余地はありましよう。陛下は男らしく、ただひたすらにあなたとの享樂を求めたのですから。ましてや、「皇后の称号もいずればそなたのもの」と口説かれれば、いささかのためらいはお持ちのあなたでも、陛下の誘いに即座に従ったのもしごく当たり前のことでしょう。ところがわたしは、力づくで陛下の臥し所のお相手にされ、カ

プリの島で淫乱の限りをつくされたティペリウス帝も赤面されるほどの、荒淫の贅となった哀れな女。忌まわしい不倫の欲望など微塵もなく、心のうちではいつも貞淑な女なのですから。

ステイファノス 失礼ながら敢えて申し上げます。お二人とも詮ないお嘆きで無益に時を過ごし、お身うちに流れるご名門の血を汚しておいでです。前帝ティテウス様の王女、皇帝陛下の叔父上の世継の姫君、許しがたい暴虐の数々を女々しくこぼされますな。ローマをお信じになるのです。ああ、こうおっしゃいますよな。「二人は非力な女の身、あの人非人、人にはあらぬ化け物に思い知らしめようとしても、血に飢えたドミテイアヌス帝は武力も思いのままの独裁者。二人の目論み、企みを少しでも嗅ぎつければ、絶海の孤島に幽閉して疑惑、禍根を断つだろう」と。

ユリア そのとおりだよ、ステイファノス。イエルサレムを攻略した父ティトウス帝麾下の軍団も今や陛下に支配され、王女だったわたしも忘れられたまま。

ドミテイラ 虚しいあいな頼みにすがって自分を見失うことこそ、自暴自棄というものでしょう。

ステイファノス 結論を急せかれますな。生命を惜しまぬ

壮士の腕一本で、護衛の連中がいかほどおりましようとも、あのお方のお生命をも意のままにいたしましうぞ。わたくしめはお二人の奴隷、お二人はまことにお優しいご主人でした。ただ今の自由の身も財産もお二人から頂いたもの。戦に慣れ非業の死をも恐れぬ戦士ではございませぬが、わたくし、正しき復讐のためとあらば、この生命を捧げて悔いはありません。高慢な皇后は皆様方をないがしろになさっている。あの皇后にじつと耐え唯々諾々と仕えるよりは、潔くご自分の生命をお断ち下さい。高貴なお生まれのお二人にはそれこそ相応しい行いかと。それとも、「やれ！」と一言仰せになれば、わたくしはあのお方の心臓を衝き正義の力で倒してごらんにいれますが。

ドミティラ わたしたちへの恩義から、真心こもった申出をしてくれおるのか。でも、そのような支払いはお前の考える負債には大き過ぎよう。誠心誠意つくしてくる下部を、確たる成算もなしに、危険なめにさらすことなぞできません。忌まわしい悪業に身をまかせ惰眠を貪っておられようが、悪業の雄叫びが神々の逆鱗にふれるまでは、神々のご加護が陛下にはおありなのです。だが、神々もいずれば公正な目で、陛下が神

を敬う心、善き行いをなさんとする精神、これらを歯牙にもかけぬさまをごらんになれば、神々も秘かに裁きを下され、陛下を悪業のままに捨ておかれ、氣づく余地も与えぬまま陛下を自滅へと誘われましよう。

ユリア 日毎つのりゆく陛下の狂気のさたには、親衛隊の兵士、側近の者ども、いや、親しい友垣ですら反感を抱くのも当然であろう。すでに元老院は陛下に反対の立場をとっておる由、耳にしておる。いましばらくして、陛下が取り巻きの者にも背かれ、ご自身にもご寵愛の皇后にもいらだちを隠しきれなくなる時が来よう。その時こそ、今はひそとも囁けぬことでも実行に移せるやもしれぬ。

ステイファノス お命じ下されば、いつなりとやる準備はできております。人間ひとりの生命より、祖国を暴君より解放することこそ重要と胆に命じておりますれば。

カエニイス登場。

ユリア おや、カエニイスが。
ドミティラ どちらからいらしたの？

カエニイス 皇后の所から。皇后はあなたの方のおざなり
の奉仕にひどくお腹立ちです。氣位が高くおなりで、
侍女のお世話だけではご不満、些細なことにもお身内
の皆さんが頭を低くしてご奉仕下さらねば、虚仮にさ
れたとご立腹なさいます。

ドミテイラ 皇后は今どちらに？

カエニイス 皇后が忝くもどこにご臨席遊ばし、いかな
る輩と親しく口をおききか、ご想像つきますまい。

ユリア ですから、どちらにおいでですか？

カエニイス 役者どもとご一緒です。皇后様の威厳を脱
ぎすて馴々しげに、この役はだれ、あの役はだれ、衣
装はどれとお尋ねになつて。洒落た衣装がないと衣裝
係をお叱りでした。悲恋の主役を演ずる悲劇役者パリ
スにはうっとりなさつていらした。パリスをご自分の
ものになさりたいのかしらと、勘繰つたほどでした。

ドミテイラ その間、陛下はどうなさつていらしたの？
カエニイス 相も変わらず、無実な人たちへの酷いお裁
きで時間をつぶしていらした。陛下は人間の美德を犯

罪と仰せになるのです。でも、今朝の一件だけは、こ
う申してよいのなら、陛下は則を越えてしまわれた。
お目付け役アレティヌスの訴えに基づき、その高潔さ

ゆえにローマで最も人望厚きお人、パルフィリウス・
スラ、ユニウス・ラスティクス兩名を断罪されたので
す。罪状はただ一つ、二人の支持者であり師でもあつ
た哲学者、パエトウス・スラシアに下された残酷な判
決を嘆いたことだけとやら。

ステイファノス この惨状を目にしても、ジュピターは
鉄槌を下されぬのか！

ドミテイラ ネロとカリギュラ、希代の暴君も悪業を命
じただけだった。あろうことか、陛下は命じたことが
実行されるのを眺めては喜ばれる。

ユリア 助けてあげられぬなら、黙つて嘆くだけ。

カエニイス 高慢な皇后がおいでをお待ちです。

ドミテイラ 今しばらくは地獄の苦しみか。

ステイファノス 卑怯者はこれ以上の苦しみに耐えられ
ぬと身を投げ死にいたします、これに反し、何度も押
し寄せる運命の攻撃にしっかりと立ちはだかることこ
そ、真の剛毅な精神と申すものです。

(一同退場)

第二場

皇帝、パーティニウス登場。

皇帝 彼奴らは拘束してあるな？

パーティニウス はい、しかしながら——

皇帝 しかしながら？ 何だと申す？ そなたの考えを

聞こう、申してみよ。

パーティニウス 申しあげます。しかしながら、陛下の

ご機嫌麗しきに甘えて、とやかに申しあげますのも一

皇帝 要点を申せ。

パーティニウス 陛下のお言葉で死を賜りました父親で

さえ、涙一滴こぼさずに見送りました陛下の下部、そ

れがしが、陛下のお裁きを不遜にも咎めだてした者ど

もに恩赦をなどと、陛下のお耳にいれるのもいかがか

と。

皇帝 何と？ つづけるがよい。

パーティニウス 正しき法の力に裏づけられた陛下のご

寛容こそ世の称賛を浴びるべきものと念じております

れば、意を決してご忠言いたします。さて、ラスティ

クス、パルフィリウス・スラ、この有識の徒兩名は鞭

打たれるのも至当かと存じます。なれど、兩名とも名

のある元老院の議員、清廉潔白、誠実な君子との世評

高く市民に敬愛されておる人物、何なりと陛下のお気がすむまで厳しく拷問にかけ、ひそかに追放に処すべきかと愚考する次第です。処刑したのち、死体をカピトリヌスの丘への路に曝すなど、ご政道の妨げになりましようぞ。苛酷な処刑は蒙昧な人民に判官びいきの氣を生ぜしめ、突然、陛下を悩ます大騒動にもなりかねますまい。

皇帝 胆の小さな臆病者めが！ 余は下手にでて臣下の機嫌などとりはせぬ、民の憎悪も恐れるものか。余が意志と権力が旋風を巻きおこせば吹きとぶ塵のような連中、あの者どももなぞ余の眼中にはないのだわ。天上に神々がおられたとて、いや、余が守護神ミネルバは別にしてだ、その神々に、このやまたの大蛇おろちのように捉えどころのない怪物、民衆を保護・心配なさる無用な時間があると思うか。真の人間らしさとはな、他を支配する力のある王者・貴族にしかないものだ。夜空を彩る輝く星々も、天啓を受け従がわんとする従者さながら、王者・皇帝のなすことを良しとして照らしだしておるわ。王、皇帝たる者は、下々の者を動かす大いなる車輪なのだ。死罪となった卑怯者二人を引いて参れ。あいつらに同情などしおる痴れ者がいたら見た

いものぞ。そ奴の身体に魂が閉じこめられておるのなら、余が処刑人の刃で身体を真つ二つにして魂を解き放してやるわ。綸言汗のごとしぞ。

(パルティニウス退場)

パルティニウス、アレテイヌス、衛士登場。

背中合わせに縛られたユニウス・ラストイクスとパルフィリウス・スラを絞首刑執行人たちが引きずってくる。

アレテイヌス (衛士に) うさんくさい者どもへの、お前の抜け目ない探りようには、陛下もご満足だぞ。いな、この謀反人の処刑に不満をもらし、臆面もなく悲しみをうかべる者は何人であろうと逮捕せよ。陛下のお考えは承知のはずだ、すぐにも実行せよ。

皇帝 愛い獵犬だな、飼い主の役に立てよ。
スラ 暴君、我らにすみやかに死を。

ラストイクス あなたが処刑できるのは、人の身体だけだ。

皇帝 そうか、では魂も苛んでやろう。黄泉の国ステイクス河のほとりで魂を呻吟させてやるわ。あそこは

な、地上の神たる君主の権威に楯突く輩が泣きもだえる場所ぞ。死は眠りだ、だがな眠りに訪れる悪夢の恐ろしさを想えば、身も竦みおろうが。

ラストイクス 罪ある者には恐怖かもしれぬ。だが、我々はちがうぞ。我らが師スラシアの生き方に学んでおる、死とは何かと。そう、我々は師を崇めたが故に罪ありとされたのだ。師の純粹無垢の魂は星になってこの目に映る。その星は美しいメロディを奏でて招いておる。あなたが地獄としたこの忌まわしいローマを去り、天上に師の跡を追い透き通った天空の彼方に我らは場を占めるのだ。

皇帝 そちの師とやらが高潔な生きかた、美德の報いでどうなったかをとくと考えたうえで師に泣きつくがよからう。美德はな、その方どもを救ってはくれぬわ。ふふ、余が獵犬が牙をむきおる。かぶりつくがよい。

(絞首刑執行人たちが二人を殴り蹴る。二人は微笑んでいる)

これは拷問の序の口ぞ、セネカをまねて涼しい顔で通してみるか。人の血の通わぬストア派の哲学、その冷たい一滴はよく劫火にも耐えるというな、さぞや貴様らの救いにならう。もつと打て、きつく痛めつけろ！

謀反人め、こたえぬのか！ 余がひとり相撲か？ 畜生、不気味な魔物が守りおるわ！ 悪党、心臓を切り裂くぞ。余が仕打ちに顔を背ける者はおるか、余を残り忍とうらむ者はおるか？

アレティヌス お優しすぎるのが、陛下の唯一の欠点と申すもの。

バルティニウス (傍白) おれは悲しみのかけらも顔には出さぬ。だが、このありさまを目にしては身体も萎える。

皇帝 このように心落ちつかぬは、初めてじゃ。頼む、生身の人間らしく泣き喚いてくれ、天上の人になるにはまだ早いぞ。適わぬか？ 余が守護神ミネルバもご照覧、余が激怒を嘲笑するとはもつてのほか、余は世人に万能の人と讃えられておるのだぞ。こ奴らが少しも苦痛を感じぬさまこそ、余がはなはだしい苦痛ぞ。通風の治療に医者が血脈を切開しようが平然たるさまだった、ローマの勇将マリウスの伝説など、今の余が苦痛にくらべればことごとしく言うには及ばぬわ。息絶えおったか？ さすれば、空騒ぎであつたか。

スラ 何のこれしき、まだまだ死にはせぬ。
ラストイクス まだ息があるのは、あなたを蔑むためだ。

我々のじつと耐える忍耐の一念が暴君の首に忍びよろう。尊い哲学を学んだおかげで、獵犬どもの拷問も音をあげずに甘受する、そう、穏やかな眠りのようにな。我々は学んだのだ、肉体は魂の借り着、いずれは流行遅れにもなるう。借り着の肉体はこのように脱がされ剥ぎとられ、引きちぎられても、魂は野獣の手のとどかぬ所で燦然と輝いておる。永遠の生命なぞ望むべくもないあなたのようなお人には、小さな傷の一つ一つに、安らぎのなさに、暑さ寒さに苦しむことに、否応なく「人間は死すべきもの」と思い知らされ、死の恐怖は心の奥底まで染み透ってきましょうぞ。

皇帝 世迷い言、よさぬか！

ラストイクス いま一言、あなたに警告しておこう。皇帝の命令でこの身体を八つ裂きにし、海にばらまいても、粉々に砕けた肉体はあなたの意識のうちに回収されましょう。皇帝陛下の砂上の楼閣がみずからの重さに揺らぐとき、わたしはありし日の五体満足の姿で現われる。そう、我々はあなたの恐怖のなかに生き生きと甦るのだ。

皇帝 身震いがする。余も裁きを下す者にあらずして、罪ある者なのか。ええい、この不気味な魔術師を引っ

立てい。こ奴らは双面神のヤヌスだわ、余がどちらを向こうが復讐せんとつきまといおる。失せる！ ただちに処刑だ！ 遺体はバラバラにして処分せい。余は運命など恐れはせぬぞ。

(絞首刑執行人たちが二人を引立てて退場)

勝利の勲に輝く王者よ、引かれ者の小唄にたじろぐや？ 何の、何の、さきほどの身震いもやんだわ。

ドミティア、ユリア、カエニイス登場、ステイファノスが従っている。

皇帝 おう、生命取りの傷になったとて、余はこの生命の泉から若さと活力を取り戻すのだ。死の淵から甦ったあのヒポリタスの再来ぞ。ああ、余が栄光！ 余の生命！ 余はすべてを捧げて悔いぬわ。

ドミティア わたしもでございます。(二人は抱擁しくちづけを交わす) ご気分がすぐれませぬとやら。お慰みの余興を考えましたの。ほほ、陛下、いままで役者たちと芝居作りに励んでおりましたの。おもしろいものですわ。退屈な部分を切り詰めまして、一編の悲劇を一つながりの場面にまとめたのです。どうやらわた

しには芝居を作る才があるようです。陛下の愛こそ何よりも大事でございますが、今だけは芝居に夢中というところ。

皇帝 いつもと変わらぬそなただ。美しく賢い——

ドミティア 寝物語で讃めていただきましょうか。ごひいきのパリスが悲劇の主役イフィスを演じますの。陛下のお身内を良いことに、皇后のわたしにも傲慢無礼なドミティラ殿、あの方の鼻を折るために、憎まれ役アナクサレイテの役を無理遣りおしつけましたから。お気にさわりましたらどうや？

皇帝 そなたが良しとするものは、すべて余が喜びぞ。余の才も力もそなたのものだからな。

ドミティア ありがとうございます。ここにお座り遊ばして。さあ、ご挨拶はぬきにして、早速お芝居を始めるように。

(二人は腰をおろす)

ファンファールが鳴り響き、イフィスに扮したパリス登場。

あの衣装いかがでしょう？ 適わぬ恋に苦しむ男にび

つたりでは？ いまにも頬をつたつて流れんばかりの涙をうかべる演技、あれはわたしの演出です。

皇帝 絶品だな。

ドミティア 台詞が始まります。

パリス 言葉にだすのも無駄だが、あのお方は美しい。高貴なお生まれ、財にも運にも恵まれたお人だ。このイフィスも心より讃える。ああ、他の女人には望むべくもない長所、美点も、残忍な心根を育むことになるとはな。天女にもまがうアナクサレイトの矜持は、恋に悩み苦しむこの胸には大いなる謎、あの怪物スフィンクスが切り立った岩の上からオイディプスに投げかけた謎の言葉よりはるかに解きたい謎だ。神々の王者たる愛の神よ、心よりあなたを崇めるイフィスは、火の消えることなきあなたの祭壇に熱い涙とともに、数知れぬ吐息の犠牲を捧げ、あなたのお力、ヴィーナスの加護を頼りにいたしておる者です。主神サトルーネスが世界を分割し物事を統べしのも、あなたの避けがたい矛先に屈伏しあなたの旗のもとに戦わざるを得ぬ、ジュピター、ネプチューン、プルトゥといった神々、この神々がわたしの愛と奉仕の犠牲的行為についての最後の裁きに寛大でありましょうとも、愛の神

こそおすがりする神。

ドミティア みごとな朗唱ですこと。愛の神様への祈りの言葉を切々と謡いあげるさま、うっとり聞き惚れますわ。

パリス 矢の尽きることなきあなたの腕から金の矢を選つてあの女の心臓を射抜き、せひともわたしを愛するよう仕向けて下さいませ。さもなくば、鉛の矢でこの心臓を射て、恋焦がれている彼女をわたしが思い切り、そう、憎むようにして下さいさらぬか、そうとなれば、恋の傷も癒されましょう。いや、とんでもない、ただ今の言葉は撤回します。あまりにも一人よがりの願い、不遜な言葉を洩らしてしまいました。己れの方こそ責められてしかるべき。あのお方は完全無欠な女性、長所、美点を誇りとしてお求めになるのは、そうだ、衆目の一致するところ、愛などではなく称賛、褒め言葉なのでしようから。だが、神々もご照覧のはず、おれには誠心誠意、二人の仲立ちとなってくれる真心がある。淫らな欲望の炎にも焼かれることなく、清らかな聖火に照らされた真心が。ああ、寒さで手足は凍えながら、おれの涙であの方の敷居をいくたび洗い清めたことか。その度ごとにおれは嬉しさに戦く唇で大地に

くちづけし、あの方のたおやかな脚から伝わる妙なる
感触に誇りを感じたものだった。

ドミティア 陛下、あれは真実の涙ですわ。あのような
男、ぜひ身近におきたいもの。

パリス 神聖な大地よ、許したまえ。入ってはならぬ聖
地に、おれは忍び入る。敢えて館の扉をたたくのだ。
だが、震えおのき恭しくたたこう、聖地を守らんと
激怒せる神々に悪意のない証しに両の手は高くかざし
て。ああ、この中に！ 悩める者に救い主現われよ！

(扉をたたく)

門番に扮したラティヌス登場。

ラティヌス おう、何者だ？

ドミティア まあ、下品な顔の門番だこと！

ラティヌス 貴様、何の用だ？ ぐずぐずと泣き声たて
おつて。とつとと失せろ。鞭をくらわずぞ。

ドミティア 悪党め！ お芝居の筋書きでなければ、目
玉を抉りとつてやるのに。

皇帝 ドミティア、門番はふざけておるのだぞ。

ドミティア このようなおふざけ、好みませぬ。あの横

柄な態度、意地の悪い下衆の証拠ですわ。下郎は甘く
すればつけ上がりませぬ。

皇帝 あれの役だからな。芝居を進めろ。

ドミティア 悪党のやる役ですわ。でも追い返せるもの
ですか。

パリス (跪く) 門番殿、あなたはいつなりと、自然の
産んだまたとない傑作、息がかよいながら天女と見紛
うアナクスレイトの姿をご覧になれる幸せなご仁だ、
この下部を哀れんで下さらぬか。溺れる者が藁でもつ
かむように、この手であなたの膝をしつかとつかみ、
あなたを男と見込んでの切なる願いだ。虎や狼、いや、
情け知らずの母親の乳を吸ったことはないお人、門番
殿、この目が泣きぬれて爛れぬうちに、ご主人に拝顔
できるようにして頂けぬか。

ラティヌス 首がとぼうが、聞かずにはおれん。

ドミティア 鬼の目にも涙とやら、あの下郎も安らかに
死ぬことができるやも。

ラティヌス 奥方様、お客人！

アナクスレイトに扮したドミティラ登場。

ドミテイヤ 誰じゃ？ 誰が来たと申す？

ドミテイヤ 陛下の従姉妹様は舞台の上でも傲慢そのものの、アナクスレイトの役にぴったりですわ。

ドミテイヤ 門番、つまらぬ客人には二度と会わぬと申したではないか。

パリス 仰せのとおりつまらぬ者、あなた様が一思いに踏みつぶす虫けらにすぎませぬ。なれど、あなた様の軽侮にあつても、わたしは墓に入り忘却の塵で身を隠すまでは、這いつくばつて、虚ろな敬意を表したりはいたしません。ああ、女性じょしやうのうちで最も残忍なお方、あなた様の判決を承った時には、喜んで自害しお目ざわりなこの身体を消すことにいたします。

ドミテイヤ 臆病者が、できませぬことを。そなたの死こそ、そなたの愛とやらが自画自賛する、最後の最大のわたしへの奉仕というもの。そなたのような痴れ者のみがある頼みを抱くのです。生まれ良く身分のある若い姫君が、卑しい男に身分を忘れてお目をかけて下さるなどと。ましてや、侍女の相手にもならぬような殿方をわたしの夫になぞできませぬ。わたしの望みはもっともつと高いものだからね。

ドミテイヤ あのお方の本性ですわ。お芝居なものです

か。

ドミテイヤ 下賤な者の顔を見、言葉を交わすなどが汚れるというもの。

パリス ご用心なされませ、傲り高ぶつてはなりません。お昇りになる傲慢まごころの階はいかに脆いものかとよくお考えを。七男七女の子宝を誇つたナイオビは、囮にのつて二人しか子のいぬレートレートを嘲り、そのあげくどうなりました？ 子供はすべて奪われ泣きに泣いて石に化したとやら。鼻高々のお美しさも時がたち病いに取りつかれば、見るも無残なものになります。財産などは盗賊の餌食。トロイの王女へキュバもトロイ陥落のちは敵将ユリシーズの女奴隷になります。だが、あなたを恋する想いだけは、時も病いも、盗賊も運命も奪うことはできません。

ドミテイヤ 神のお告げにもまさる助言ですこと！

パリス わたしへの死の判決を取り消され、お優しくなれますでしょうか？ それとも、ご意志のままにいたしましょうや？ ご決断を！ もう待つことはできませぬから。

ドミテイヤ ただちに処刑ぞ。そなたの悲劇とやらを心動かされずに見つめましょう、ほほ、時には吹き出す

やもしれぬ、わたしには喜劇にしか見えぬのだから。

ドミティア 人でなし、悪魔のような女だこと！

パリス では、最後のお許しを。恋する者の呪いがあなたに下りますように。これからのち、わたしのようにならねえ焦がれる人に蔑まれた男は適わぬ想いに悶えながら、高慢、残忍な相手に一言こう言えばよい——
「酷いお方、あなたはイフィスを傷つけたアナクサレイトそのものだ！」その驕慢な心を愛でて、あなたが滅ぼした残骸をお目にかけてみましょう。

(首括りの紐を取りだす)
結婚を司る神ヒーメン、二人を一つに結びつけるあの神の絆に代わって、生命を断つこの紐は二人を永遠に引き離すものだ。こちらの門前で、わたしの愛あなたの傲慢の証しに、すぐにも首を括りましょう。

ドミティア (立ち上がる) だめよ！ 皆、生命が惜しいなら止めて！

皇帝 ドミティア、どうしたのだ、とりみだして？ 芝居ではないか。真に迫ってはいるが、そのようにとりみだすのはいかがかな。

パリス 端々まで注意ぶかく観て頂きありがたく存じますが、芝居を真実のものとして演じた訳ではございま

せぬ。

ドミティア こちらこそ詫びねばならぬ。目にしたものの素晴らしさに我を忘れてしもうた。

皇帝 芝居をつづけよ、最後はどうなるのだ？

ドミティア 止めにして下さいませ。大団円は存じておりますし、急にひどく目眩がいたしますの。

皇帝 では、寝室に退るがよい。余が看病しようぞ。

アレテイヌス (傍白) あのとみだしたようす、ただ事ではないな。よし、何としてでも理由を探るぞ。

ドミティア パリス、明日いらっしやい、ご褒美をとらせましょう。

(ドミティアとステイファノスを除いて全員退場)
ステイファノス ドミティラ様！ 唯々諸々と芝居をおつけになるのですか？ 今回はこのような役ですみまして、次はジブシーの踊り子のように、淫らな踊りまでやることになりませう！

ドミティラ 我慢しておくれ。お前よりもっと苦しいわたしが耐えているのだから。復讐を果たすまでは耐えることも慰めになろう。

(退場)

第四幕

第一場

パルティニウス、ユリア、ドミテイラ、カエニス登場。

パルティニウス まさか、そんなことが！ あのパリスが？

ユリア お前は目にしておらぬからだ、イフィスに扮したパリスが高慢な麗人アナクスレイトへの適わぬ恋をはかんで、おのが首を括る芝居を演じたその時、皇后が狂乱の状態になられたのを。

パルティニウス いや、それは存じております。なれどあれがきっかけで皇后ともあるう高貴なお方様が役者ごときに、無分別な想いをかけられるなど真にできませぬ。

ドミテイラ 皇后はお側に侍るわたしたちが何を見ようが、お氣遣いはなさらぬ。陛下のみ心はご自分の意のままとお考えのようだ。お二人に敵意を抱く者が何かを企むなど、夢にも思われぬであろう。

カエニス 今朝もお身体の不調を訴えられ、陛下に退室をお求めなされた。

ドミテイラ 陛下の姿が消えるやいなや、「チビ！」とお呼びになった。そう、これがわたしを見下げておっしゃる言葉。「スリッパを履かせておくれ、ペンと紙を持っておいで。手紙を認めるから」とあわただしくご命令。紙をひったくるや、引きつったお顔をなさつて、一瞬の間も惜しむかのように、寝乱れたお姿にガウンをおったままで、何やら知れぬ書状をお書きになり封をなさつた。表には「最愛のパリス殿」と記してある。

ユリア 文遣いのお小姓にこうもおっしゃつた。「パリスにご機嫌伺いに来よと申せ。陛下は腫れ物に触ることお氣遣いされ、お呼びせぬかぎり入つてはこられぬが、この部屋への出入りは人の目につかぬようにと伝えよ」

パルティニウス いかさま、皆様方の嫉妬のあまりの邪推ではございませぬな。これほどあからさまなれば、お身内の方々でなぜこの真実を証されませぬ。

ドミテイラ ああ！ わたしたちにはできかねること、わかっておりますが。奇跡が生じ高慢な皇后の奴隷扱い

から解放される、それこそ何よりの願い。なれど、お前が薄氷を踏んでの先駆けを望むのなら、ありのままを申そうぞ。

パルティニウス カルディアの星占いの流れを継ぐアスクレタリオと申す男、かの男は先般陛下のご運を星に占い、陛下は非業の死をとげられんと微に入り細にわたつて予言し、そのあげく叛逆罪を宣せられ即座に捕縛されました。このアスクレタリオ捕縛の電光石火の早業は無理としても、それがしは皆様方のため立ち上がりまします。それを了とされますなら、お話し下さいましたこと、アレティヌスにもお伝え願います。人を陥れるがかのお人の本性、理由なぞ何であれこの一件、表沙汰にしますでしょう。国家安泰のためなぞでなく、いや、大義名分などアレティヌスには無縁のこと、陛下の周辺を油断なく見張るために、そうそう、今度はパリスを失脚させることも目的となりましようかな。あの役者には元老院で赤恥をかかされていますから。

アレティヌス登場。

噂をすれば何とやら。鼻のきくご仁のこと、もう嗅ぎ

つけておりましたよ。でなければこちらの思惑ちがひ。皆様方、これからは思いのままにやってみます。だが、今しばらくはそれぞれの胸のうちに。

(退場)

アレティヌス 誇り高き皇后が毘にかかるとは。

ドミテイラ この男、何をのぼせておるのやら。

アレティヌス ローマ随一の名優もですぞ！ いかげですかな。皇后と名優の醜聞、口のおごった皆様には何とも苦い味かと。いや、なに、陛下以外には誰ひとり味わえぬもの、権力はもつと苦い味でしょうか。またとない好機、この醜聞、政治とつなげてどう利用しようかとほくそ笑んでおる次第。もつとも今でもわたくしは陛下の信を得て、卑しいローマの首根っこをおさえ、地位も土地も、家の子郎党、友人に分かつ権限は頂戴しておりますが。

ドミテイラ いつもにくらべ横柄な物言いだこと。

ユリア アレティヌス！

アレティヌス これはこれは。地位、称号は一切なしに呼び捨てでございますか。お三方が王女であらせられ人に仕えられる御ん身の頃は、皆様に冠せられた称号は立派なものだったとの愚痴でございましようかな。

だが、お可哀相にただ今は高慢ちきな一人の女性に仕える奴隸の身、最悪の境遇におられます。真黒に日焼けしたガレー船の奴隸がオールから逃れたいと願っているように、皆様方も縛を断つ雄々しく武装した解放者を待ち望んでおいでのはず。何の、誑かしではありませぬ、皆様の解放を声大にしてお伝えするために参つたのですぞ。それだけではありませぬ、皆様の不幸を嘲笑つたあのお方、皇后、いや、ただのドミティア、何なりとお呼びになればいい、その女人の地獄墮ちを目になさいますから。

ドミティア　そなたが本気なれば、今の話しこちらにもいささか証拠もあるが。

カエニイス　そうじゃ。

ユリア　証拠はある。

アレティヌス　ご懸念には及びませぬ。随所に目となり耳となる者がおります。こ度の一件、万事存じておる次第。皇后を虜にした例の芝居の台詞、仕草まで。内心の激しい動揺を目眩などと身体の不調になさつたことも。文遣いの小姓を買収し、あのお手紙を一読し元どおり封をして持たせてやりました。お三方の悲嘆、お苦しみはこちらとて同じこと。パリスはかならず参

ります。さて、二人の仲はどうなりますことやら。ドミティア　そこまでとは。のう。

アレティヌス　哀れな侍女同然の皆様を金の力で解放し不思議な奇跡をおこしてみせましょう。さあ、お仲間——（一通の書状をさしだす）これは陛下に宛てた訴状。これこそ皇后を沈め皆様を浮かび上がらせるもの。ご署名願います。（三人は署名する）

ユリア　我らが名を連ねしこの訴状、正しからんことを。カエニイス　切に望む。

ドミティア　わたしが届けを。

アレティヌス　後はおまかせ頂きたい。

皇帝が衛士をつれて登場。

皇帝　外征の軍も勝利とはめでたい。その間、余は国内にあつて外敵より難物のローマの不平の輩を鎮圧し、疑惑、不安も一掃、平和の味を満喫したわ。頭上をおおう天空には近ごろ、怪しい光を放つ星があり、いかさまな星占いどもは帝国の衰運、君主の死の前兆などと賢しらげに宣伝しおるが、何の怯むものか。守護神、雷神の加護ある余は曲学の徒、いや、運命に挑戦して

やろうぞ。余は金城鉄壁の君主、指一本触れさせはせぬ。

アレテイヌス 陛下！

ユリア 超人の陛下——

カエニイス 理をもつて情を抑えられ——

(ドミテイラが訴状をさしだす)

ドミテイラ 陛下の志操堅固を証す機会となされませ。

勝利をジュピターに謝するべくカピトリヌの神殿に詣でられる折りの、毅然たるご様子でこれをご覧に。

皇帝 何だと申す？

ドミテイラ 下々の者には恐れ多くて仰ぐだに適わぬ陛下

下のお目を、しばしこの書状にお止め下さいまし。

アレテイヌス 陛下のおん血がいささかなりと怒りに沸

き立ちますれば、我々には乾坤くつがえる感がいたします。

ドミテイラ 堪忍の限りを尽くして秘していただけね

ば、わたしども瞬時に地の底まで呑みこまれてしま

ましよう。

カエニイス 皇后にお仕えることの苦情などではござ

いませぬ。皇后を告訴いたしますのです。

ユリア 皇后の不義がその原因。

アレテイヌス 確たる証拠に基づき証しだてましようぞ。

ドミテイラ 陛下より賜つた聖火、あの聖なる輝きを消

してしまわれた皇后の真のお姿を。

皇帝 余には疑問じゃ、皆の訴え、判断しかねるわ。皇

后が余に捧げる無二の貞淑、皆はその祭壇を悪意に満ちた暴力で壊そうとしおるが、無駄な骨折りだわ。ど

す黒い嫉妬の妄執として一点の染みだにつけえぬ真まことの愛、その純白のローブは汚せるものではないからな。

しかしだ、余も皆がむりやり剥がさんとする王者の權威は取りさり、一個の男子としてことの真偽を論じる

のも一興。余のおかげで榮光に浴し榮華をきわめる淑女が皆の前に卑しき恥部をさらすであらうか。昨日の

芝居を観てのあまりにも取り乱したさま、あれはあらぬ憶測を招かぬでもないが、それにしてもだ、皇后が

疑いある行為をし、目撃したのがここにおる者だけとは合点がいかぬ。皆は皇后に仕える立場、皇后は意の

ままに皆を使う、したがって憎しみも受けるであらうな。アレテイヌス、皇后はそちが余の公私にわたる相

談相手、余の腹心であること、とくと承知のはずだ。美しくあるがゆえにまたとなき地位に昇つた皇后が、

その転落もまた劇的であると申すか。はたまた、余が皇后に抱いた欲望、前夫ラミアの処刑、その復讐を皇后が図ったとも、いや、夫を捨てた己れ自身にも皇后は刃を向けたとでも。おお、皇后は皇帝の臥し所を去り、役者風情に走ったとでもぬかす所存か。

アレティヌス 貞淑という美しき衣服に包み隠された忌まわしき罪、人の理性を越えた恐ろしき力、これは何人も否定できません。

ドミテイヤ 皇后は陛下の権力と陛下のお言葉に守られていること、百も承知でいらつしやった。そのご身分に溺れてこのような事態になりましたのです。周りの目なぞかまわず、ご自分への風当たりが強いのもお知りにならずに。それもこれも、陛下の度を越したご寵愛が皇后のお目を曇らせてしまったのでしよう。

皇帝 皇后を誹謗中傷するのは良い加減にせい。皆が眞実、事実と言ひ張ろうが作り話に過ぎぬわ。だが、その作り話が余の胸中に怖い戦をしかけたぞ、余が軍団が反旗を翻して攻め寄せよるよりはるかに厳しい戦だわ。この訴状には余の破滅を宣する無数の刃がある。いや、身の破滅などよりもっと恐ろしいことを告げる運命の星が覗いている。これは死の髑髏ぞ、この訴状

を目にし万が一皇后の不義が証されれば、一瞬のおおのきで余もまた生身の人間と知らされ、皇帝は神の矜持も揺らぐこととなる。だがな、皇后の胸のうちは掌を指すごとく承知の余だ、この目で確かめず、他人の証言から皇后の不義の疑いが生じたとして、剛毅の余だ、うろたえたりはせぬ。痴れ者め、案内いたせ。皆の生命と引き替えてもはつきり証してやるわ、皇后の貞淑、皆の不実をな。あの皇后が不義を犯したとあらば、世人はあげて嘆こうぞ、今の世に、そして未来永劫、貞淑な妻はあらずと。

(一同退場)

第二場

ドミテイヤ、パリス、召使いたち登場。

ドミテイヤ さあ、お前たち、呼ぶまで下っていておくれ。いらぬ気をまわして覗き見、盗み聞きしようものなら、お前たちの生命の糧、わたしの寵をなくすことになるから。

(召使いたち退場)

ああ、そなた一人だけ残したとて、そなただけを思召しとうぬぼれるでない。

パリス お召しにより参上いたしました。さもなくて、恐れ多くてお傍にも寄せませぬ。

ドミティア そなたに下された陛下のご寛容こそ、恐悦至極とでも申すがよろうに。それとも、ご褒美を賜った折り、酒杯に向かい、皇后との密会を自慢するのがそなたには似合いやもしれぬ。

パリス 皇后様、それは稲妻と戯れますようなこと。

ドミティア 承知であるが、生殺の断は陛下お一人のものではない、怒りに燃えれば皇后にも必殺の雷はあ

る。
パリス 身分卑しきこの身に相応しきは、皇后様のお力を云々することではなく、皇后様の御意に従いご奉仕いたしますこと。

ドミティア そなたを信頼して秘事をあずけても、秘密の重さに耐えかねはしまいな。

パリス 胸中に入れました秘事、いかに苦しくとも身が灰になるまで、外に出すことございませぬ。死が近づき煩い多き老齢になりましても、お言葉賜り働くことを思いますと、いかような些事であろうと、それ

に携わりますこと、尽きることなき喜びにございます。

ドミティア そなたの言葉、信じたいものよの。この目にはそなたこそ、気高く賢く、華やかで頼りになる、ああ、詩人ならばもっと上手く讚える言葉もあるうに、丈夫に映る。美酒の移り香が器に残ること、そなたには舞台で演じる偉丈夫がそのまま乗り移つておる。たじろぐでない。嘘はつかぬ。そなたという書物には、舞台で人を魅了してやまぬ俳優パリスの才能、魅力があますとこなく記してあろう。

パリス 皇后様、その逆に、痴れ者、拗ね者、卑怯者、いかな弱虫、破廉恥漢を演じましても、無理にでもその人物になりきらなくてはなりません。皇后様、ときに華やかときに惨めに舞台に現われましよう、芝居が終わり衣装を脱ぎ捨てれば、ただのわたくしという人間にしかすぎませぬ。

ドミティア おお、わざと知らぬふりをしおるか。この切なる想いが通じぬのか。貴婦人の慎みなどかなぐり捨て、あからさまに申そうぞ。そなたに想いをかけておる、我がものにしたいと恋焦がれてのう。そなたこそ愛しい殿御、陛下よりずっとずっと恋しい。よい、至尊の極みからそなたの卑しき身分を見下ろし愛でる

とせば、そなたは心をこめて仰ぎ観ることこそ肝要ぞ。パリス 皇后様、心鎮めてお聞き遊ばし、王者の恋敵ライバルとなります名誉をなぜ退けるのか、その理由を何卒ご承知おき下さいませ。この生命も財産もすべて陛下より賜りましたわたくしが、お褒めにあずかりました身のほども弁えずに、忘恩、虚偽、反逆で報いることができましようや。あなた様が、ヒツポリュトスを誘惑したファイドラ、あの怪しくも美しい姿と化し、邪恋に狂った女人をしのぐ、若者を誑かし傷つける絶大な力をお持ちになりましたとも、皇帝の臣たる者の忠誠、人の正義、これがわたくしの「否！」の答えを守ってくれましよう。

ドミティア 想いのたけを聞きおりながら、ずるいこと。並みの女なら快樂を達する手段の一つとして、神に祈願、懇願いたすであらう。だが、皇帝をも世界をも支配する力のある皇后ともあらう者が神頼みとは悲しいことよのう。わたしは皇后、そなたに有無は言わせぬ。この胸の想いの激しさは中途半端ではすまされぬ。わたしは賞罰、いずれも手心は加えぬから。今の言葉はそなたへの警告ぞ。清廉潔白だけでは下々の者はずいてこぬ、時には清濁併せ呑む度量もいるもの。往々に

して、悪の報酬は善の報酬をうち拉ぐものだから。さあ、言葉を飾らずに、何と答えおる。

パリス (傍白) 身動きならぬ狭間に閉じこめられた！ああ、抗えば死、諾うべなつたとて秘密にすることは可能。だが、おれは汚れない身で世を去り、後の世に称揚されたいのだ、陛下の信をまっとうし皇后の誘惑をも断つた男とな。それこそ、世人の目にも、金と名誉にっられて罪ある生をおくるより、はるかに美しく映るであらう。おれの立つ基盤はそこだ。——できませぬ、してはいけませぬ、きっぱりお断りいたします。

ドミティア 何と！虚仮にしおるか！(傍白) 楽観も悲観も避けるとせば、折衷でゆくしかない。——そなたに愛をうちあげたは誰か、とくと思索するがよい。兄が妹に抱く純な気持ちまで否とは申すまい。

皇帝、アレティヌス、ドミテイラ、カエニイス
二階舞台上に登場。

虚仮にされたのではない印に、くちづけが欲しい。(パリスは軽く接吻する) いま一度しつかとくちづけを。(二人は激しく接吻する) おお、これでこそそな

たはパリス、わたしはトロイのヘレンぞ。

パリス ご意志なれば。

皇帝 さすれば、余が寝取られ男、スパルタのメネラウスか。余にもわからぬ、このようなこと目にして余はどうなるのだ。

ドミティア この機会、逃してはならぬ。くちづけは食欲をそそる前菜、さあ、一番のご馳走を。(パリスにあまくささやく) そなたは姿を変えて忍んできたジュピター、わたしは夫と信じて迎え入れたアルクメナ、あの二人は不思議な魔力で一夜を三夜に引き伸ばし、睦み合うてヘラクレスを儲けたそう。

皇帝、衛士登場。

皇帝 だが、夫のアンfitriオが立ちほだかり、カーテンを引く。

パリス ああ!

(倒れてうち臥す)

ドミティア 卑劣な謀りごと!

皇帝 いや、密通の姦夫姦婦を投網で一網打尽にし、神々にお見せしたヴァルカンの故事にならったまでだ。余に言わせれば、神々こそ悲しい立会人だわ。

神々が楽しんでご覧になろうや、そなたが己れを売り渡した快楽に恥じ入っておられよう。そなたを何と呼んだらいいのだ? 恩知らず、裏切り者、淫乱女、不義を犯された夫が怒りにかられて吐き出す罵詈雑言、どれ一つとてそなたを言い表せぬわ。そなたを卑賤の身から至尊の極み皇后の位にまで取り立てたのも、余が寵をないがしろにし忌まわしき行為にて余が胸に、畜生より卑しく人よりも恐ろしい毒蛇を住まわせるためだったか。余の浅慮から身内の者をも、そなたの虚飾、傲慢に仕える侍女にしてしもうたぞ、ただただそなたの意を迎えんがためにな。その報いがこれか? 跪かぬか、泣かぬのか? 過ちを恬として恥じぬか? 何とか申せ! どう申し開いて余が怒りを解くぞ?

ドミティア こう申し上げましょう。陛下の欲情がこの身を売女とし、そのお返しにわたしの欲望が陛下を、いえ、実際に犯してはおりませぬが、阿呆鳥にいたしましたと。

皇帝 恥知らずが! ——この女を引いてゆけ。音をあげるまで痛めつけろ、だが殺すな、自ら地獄墜ちを思い知らせるのだ。いや、待て。これの美しさには未だ余は抗えぬ。糾弾を潔しとせぬ思いがして憎む気も

うすれる。殺せ！ 待て！ ああ、憎悪してしかるべきなのに、愛しさが募りおる。見つめているうちに、不甲斐なく甘い言葉を洩らしそうだが、余が受けた痛手も忘れ、面目次第もなくあれのご機嫌をとるためにな、余が守護神ミネルバはお見通しだわ。あれの部屋に引いてゆき閉じこめておけ。いましばらく頭を冷やしてから断を下す。

(衛士がドミティアを引いて退場)

アレティヌス (傍白) 血が収まったところで恩を売るとするか。—— 陛下、陛下を思えばこそその臣下の務め——

皇帝 よし、よし。褒美はとらずぞ。貴様は余の平安、安静を奪いおったな。貴様のおかげでとくとわかつたわ、平安、安静がないとわかつた時には、帝国と引き換えても購わねばならぬとな。

衛士登場。

—— 二奴を首括りにせい。女どもは地下牢に幽閉だ。鈍いお人たちだ、ただ今の一部始終、余には癒しがたい苦痛だが、皆にもずつしり重荷になるとはお考えに

ならなかつたのか。連行せい、口を開かずな、返答は聞かぬ。

(衛士、アレティヌス、ユリア、カエニイス、ドミティア退場)

ああ、パリス、パリス、そちと何を語ろうや？ そちに死を与える際にどうやって知らせようぞ、余がどれほど悲しみ、我が意に反してそちを死に追いやるかを。なあ、パリス、かつてそちを寵愛した余だ、ぜひとも聞かねばならぬな、なにゆえ皇后の誘惑に屈したのか、その釈明、弁明を。こ度の一件、忘却の淵に沈め得るようそちが充分な申し開きをなすこと、余は切に望んでおるぞ。余の目を見よ、心して聞こう。

パリス 陛下、生命乞い、忘恩の弁明の言葉なぞおさら陛下のお気持ちを傷つけましよう。わたくしは万死に値する罪を犯しました。今の願いは速やかに死を賜ることだけ。己れが生命もて罪を贖う意を決しましたわたくしが、生命を断ちました時こそ、何卒、罪をお許し下さいませ。己れ自信の弱さ、あのお方様の強く熱いお気持ち、陛下もつとにご承知の美しきもの、誘いとしか、釈明の言葉はございませぬ。非力のわたくしが、陛下の愛を享受された女人に慕われましては逃

れる術などありはしませぬ。これですべて。今度は陛下のご判決を。

皇帝 どう下すべきか、余の思案に余る。そちの過ちが許せるものであつたらなあ。そちが皇帝ネロのごとく狂気かられて、ローマの放火、軍の放棄、議員の肅清、神の冒瀆、ローマの法が死罪と宣するどんな罪を犯そうが、護民官どもに文句は言わせぬ、余の力でそちを恩赦にしてやるのだが。

パリス されど、こ度のことだけは陛下もご容赦なさいますまい。いや、なさつてはいけません。下々の者としてかかる事態に激怒せねば嘲笑の的というもの。皇帝陛下が確たる理由もなく侮辱に甘んじたなどと、後の世に伝えられてはなりません。

皇帝 真情を吐露して己れを責めおるか、余にもずつしり応えるわ、余とローマの守護神ミネルバが力失い、「皇帝、よしなに頼む」と叫ばれるよりもな。どうしたことだ、慈悲の念がわくとは。立つがよい。どうなるか、まだわからぬ。だが、いらぬ心配はするな、望みをもて。(パリス立ちあがる) 余はやるべきことをやるまでじゃ。さて、「不実な召使い」とか題された芝居を観たことがあつたな。

パリス はい、御前で上演いたしました。

皇帝 あの芝居は、さる領主が寄る辺なき男をとりにたて、旅に出ると称して、留守の間、領国の支配を任せるといった筋立てだった。領主は一つ条件をつけた。過去に不義の前科ある妻に信をおけぬ領主は、男にきつく言いおいた、どんなことがあるうと妻の誘惑に負けてはならぬぞと。

パリス 仰せのとおり筋立てでございます。

皇帝 そちの役は何であつた？

パリス タイトル・ロールの不実な召使いを。

皇帝 そうか、そちが演じたのだったな。役者どもは外で待ちおるか？

パリス 皆そろつております。陛下が仰せの芝居、演じてご覧に入れますよう。

皇帝 呼び入れよ。領主役は誰ぞ？

エソプス、ラテイヌス、貴婦人に扮した少年登場。

エソプス わたくしが演じます。

皇帝 領主にびつたりとは言い難いのう。余の方が適役

だ。余のローブと花冠、脱がせよ。かつて皇帝ネロはローマのコロシアムによく姿を現したものだ、余もこっそりと舞台に出てみるか。髭などつけずとも、このクロークと帽子だけで、どうだ、領主の役にびつたりであるうが。

エソプス ただ、制裁の場では、切っ先を丸めました小道具の剣をお使い下さいませ。(小道具の剣を差し出す) 何卒これをお使いになり、陛下の剣はそこにお置きになりますよう。

皇帝 その必要はないわ。いかな事態でも余が剣は離さぬ。さて、余興はほんの一場面じゃ。妻が横柄な物言いで、家臣を誘惑する場面からだ。余の出番がきたらば教えよ。さあ、始めてくれ、楽しくやれよ。新米の役者だが、制裁の場ではもの見事に演じてみせるわ。ラティヌス 何で陛下がこのようなこと？

エソプス 仰せに従うまでだ。
皇帝 芝居はまだか——
パリス 覚悟はできておる。死神の姿もはっきり見えるぞ。この胸に狙いさだめた必殺の矢、凍りつくような抱擁に五感が痺れゆく、ああ、その時こそ陛下のお気持ちも収まるのか。それなれば、世に永らえるなぞ望

みはずまい。

少年 お前に命令するわらはが乞わねばならぬのか。主人に跪いて衣食を恵まれるご家来に、意を求めよとか。わらはの情けを拒む口実に、旦那様のご恩、忘恩は生命取りなどと、言い繕うでない。露見したとて何ほどのことがあるう、旦那様はわらはがいかようにでもしてみせよう。

パリス 仰せのごとく奥様でしたら、お殿様の名譽も守り下部であるわたくしが忘恩の徒にならぬような遣り口で、この身をいかようにもなされませう。あなた様は若くお美しい、貞淑で良き奥様であらせられませ。それこそ奥様のお幸せをもたらしたものですから。

少年 恋に悶えるこの胸はそのような言葉では癒されぬ。少し考えれば、愛の女神ヴィーナスの意を迎えようとて、つまらぬ言葉は無益とわかるはずじゃ。血が滾ってもう待てぬ。わらはの意が適うかどうか？ 意が適わず、お前と快楽の時をもてぬとあらば、気も狂おうぞ。ほほ、そうだ、良い手がある。旦那様がお帰りになったら告白するのだ、さめざめと涙を流しさも本当らしく、お前が獣のように無理無体にわらはを手込めにしおつたとな。さすれば、「畜生」、「人非人」

と額に入れ墨され死を待つこととなる。その覚悟をしておおき。

パリス (傍白) お殿様は奥様の告白を真にうけること明らかだ。罰を被るのはこちらだ。あれかこれか、頭を働かせれば、選ぶのは自分に得の方か。——奥様のお怒りで本も子もなくすくらいなら、わたくしは負けました。お約束にこのくちづけを。

エソプス 陛下、出番でございます。

皇帝 今、出よとな？

エソプス はい、ご存分に。

皇帝 悪党め！ 恩知らずの悪党！——台詞がつづかぬ、役を忘れてしまうたわ。だが、演技はできるぞ。こうだ、こうだ、こうやるのだ！

(パリスを何回も刺す)

パリス ああ、演技ではない、真実の死だ。

皇帝 パリス、そうだ、これが余の裁きぞ。余みずから誅殺したを光栄とし、もって瞑せよ。余の権力をもつてせばそちを許すことなど容易だわ。だが、皇帝の権威は揺らいではならぬ。皇帝の名譽を慮おももんばかれば酷いことだが、許すわけにはいかぬのだ。されば、そちを愛した証しにそちの最後を美々しく飾り、パリスを有象

無象と區別し愛惜の念を示すこそ余の想いぞ。処刑を百人隊長の劍に委ね、重罪ゆえいたし方ないとして、死体を八つ裂きにするなど、余の意ではない。ローマーの名優に相応しく、芝居の流れのなかで死に、しかも、皇帝の手にかかつて名譽ある死をとげる、このようにいつの世までも拍手喝采される死、これこそ余がそちに望むことなのだ。

(パリス息絶える)

魂が肉体の牢から解き放たれたか。天に昇るがよい。亡骸は薪の業火で灰にし、その灰は金色こんじきの壺に入れて眺めようぞ。詩人は棺を悲しみの言葉もて送り、舞台では追悼の芝居を上演し、パリスを愛でし観客は突然の死に涙するであろう。だが、墓碑銘に死の理由を記してはならぬ。

(一同退場。葬送の曲が流れるなかで俳優たちがパリスの遺骸を担ぎ、皇帝とその他の者が後につづく)

第五幕

第一場

バルティニウス、ステイファノス、衛士登場。

バルティニウス あ、の星占いを厳しく見張るのだ、誰も近づけてはならぬし、口をきかせてもならぬ、いずれ陛下のお呼びがあるろう。

(衛士退場)

なあ、ステイファノス、近頃の陛下の異様なご心情、貴公が逐一話してくれたが自分には納得がゆかぬのだ。皇后の不義密会の現場を陛下にお見せした、差し出者のアレティヌスは陛下の逆鱗にふれ、死を賜った。逆に、お手打ちになさったパリスを陛下はいたく不憫に思っておられる。王女方は孤島に幽閉となった。だが、先程の不幸な一件、その張本人の皇后には何のお咎めもなく、まことに寛大なご処置とはな。

ステイファノス むしろ、何やかやと皇后のご機嫌をうかがっておられます。陛下の深情けの惑溺、かように申せましょう。皇后赦免の請願が市民から寄せられた云々と陛下は体裁をつくらせておられますが、とんでない、市民は今の皇后を戦、飢饉などよりもっと憎んでおります。だが、ご用心なされませ、あなた様

が皇后排斥の陰謀に加担しておるなどと勘繰られてはなりません。皇后にそれとわかれば、いえ、疑われただけであなた様は失脚ですぞ、思慮をなくされた陛下をあやつる皇后、そのお力は以前よりはるかに強いものですから。

バルティニウス 恐ろしい話よの、だが、いずれ機が熟

せば――

ステイファノス 「やる」と一言おっしゃいませ。どんなことがあるうと、わたくしはあなた様のお味方。

バルティニウス もう一つ確かめねばならぬことがあるのだが、後ほど貴公に報告しよう。

ステイファノス 暴君の愚鈍、皇后の驕慢、とくとご覧下さい。

(二人は物陰に隠れる)

皇帝、ドミティア登場。

皇帝 ああ、すべては過ぎ去りしことよ。

ドミティア 陛下にはそうやもしれませぬが。

皇帝 ドミティア、許しませぬ。そなたが前にもまして機嫌よう迎えてくれれば何よりじゃ。余がそなたを

侮辱したと申すのなら、そなたの意に添わぬことはやめにする。だが、何としても余はそなたを口説きおとすぞ。そなたの犯した罪は余の慈悲によって消し去られておる、いいか、余はなそなたの罪を許しておるのだ。

ドミティア　こちらでお願いしたのではございませぬ。自分では罪などと思ひもいたしませぬことでお許しなほど大仰な仰せ、この上ない辱めですわ。でも、ただ今のお許しとやらに声を荒げて逆らいはいたしませぬ。軽く聞き流しますことこそ、陛下の理不尽なお怒りへのわたしの反抗となりましょうから。殺戮、強欲、凌辱、こういった身の毛のよだつ恐ろしきことごとが、諂い者の甘言では陛下の徳ともなり、極悪のものではないにしろ陛下のご機嫌に適用もの、そのみが正しく法に則したものであるのです。さらには、図におのり遊ばして陛下は、「余は神なり」との不遜な考えさえお持ちになる。なれどわたしは、鞭、斧を手にした陛下の衛士に取り巻かれ、陛下のお力をもって迫られましよう、面と向つて申し上げます、ローマのドミティアヌスは、そう、陛下と付け加えましよう、意気地無しの不甲斐ない男、荒んだ心根の奴隷に過ぎぬと。

ほほ、わたしがパリスに想いをかけあの役者に溺れたよりも、もつとわたしに現を抜かすさもしい根性の哀れなお人。

皇帝　余が生涯でこのように罵られるとは。聞くおくだけで咎められぬとは。う。お、お、そなたは余が抗えぬを承知のはずだ。だがのう、ものには限度があるわ。リディアの女王オンパレーはヘラクレスを虐待したというが、そなたは余にもつときつく当たりおる。余とて堪忍袋の緒が切れれば、いかに愛する者であろうともその軛は断つぞ。

ドミティア　無駄でございませう。おできになりませぬ。陛下はわたしの美しさから永遠に解放されぬ虜囚、逃れようとしてわたしの帝国は陛下のローマ帝国よりはるかに広大なもの。このこといささか手荒な手段で証しましょう、あのパリスの死を悼んで。今はお怒りで真つ赤なそのお目から、わたしの機嫌をとろうと空涙が滴りおちて参りましよう、わたしを抱き締めようとして膝を折られましても抱擁など適いませぬこと。陛下の心の奥底が見えますのは、まさにその時。陛下は痛恨の思いで切望なさっているのです、パリスよ生き返れ美味を堪能せよ、余は食べ残してもかまわぬ、そちが

居らねば残り物にもありつけぬからと。

皇帝 おう、守護神ミネルバ！

ドミティア (ミネルバの像を指差して) ここにおられます。お緋りなさいましたら。でも、ミネルバの神も陛下の剣をこちらに向けることはできません、わたしの方が陛下には強うございますもの。配下の百人隊長を並べてこう命じなされませ、「思うだに身震いする酷なことだが、誰かやれ！ 皇后を亡き者にし四六時中余に付きまといて離れぬ復讐の女神を追放せよ！」欲望に駆られた陛下が、夫ラミアから無理遣りわたしを奪い取ってしまった際のラミアへの残忍な仕打ち、わたしの死でもってその償いも果たされましよう。わたしがパリスの後を追って生命を断たぬ理由は、わたしに憎まれて一層募る陛下の劣情が陛下を惑乱させますさまを見たい、ただこれだけでございませぬ。では、蔑みの限りをもってお暇いたします。

(退場)

皇帝 余は嫌われ者か？ 皇帝ではないのか？ 余が初めてこの驕慢なサイレンに目も耳も、いや、心を奪われた時に、慢れる魔物の足下に余のすべてローマのすべてを投げだしたのだ。慨嘆する気力は余のうちに眠

りおるのか？ それとも、盲愛に溺れ沈んで、サイレンの怪しくも美しい魔の歌声を聞かんと、性懲りもなく頭を下げるのか、余が隷属の身になるというに？ いかん、目を覚ませ！ 怒れ！ 恥辱を受ければ情眼も醒めるわ。よし、威厳を取り戻すぞ。余にはサイレンの心臓を突き刺す剣はなく、「殺せ」と命ずる舌も持たぬが、(手控え帳をとり出す) 激怒に震える手で文字は乱れようが、「皇后処刑」とここにしっかりと記しておくからな。ミネルバの神よ、余を守り給え、神の力の正しからんことを！ (手控え帳に文字を記す)

おう、これであの女も彼奴らの仲間だ、余の恐怖、疑惑を消すべく明日にも抹殺の断を下した連中と同じだ。

ステイファノス (傍白) あの死の手控え帳は初めて目にした。高位高官の方々も何人かは記されていような。

(退場)

バルティニウス (傍白) おれも危ない気がするぞ。

皇帝 誰かおらぬか？

バルティニウス (進みでる) 陛下。

皇帝 そちか。兵を動かす將軍も余の一睨みで怯みおる、將軍たちが束になっても女一人には勝てぬわ。引いて

参れと命じた、例の星占いはどこにおる？

バルティニウス 陛下の御意のままに処刑を待つております。

皇帝 連れて参れ。

(バルティニウス退場)

アスクレタリオ、親衛隊の兵士たち、衛士登場。

余みずから訊問しよう。——さて、その方、星運に通じその道の精進で得た術のおかげとやらで、余が生命失いローマに決別する日や時間まで賢しらげに予言し、はたまた、余の非業な最後の詳細を承知と申しおるそうだが、余がことがわかるその方だ、己れ自身の運命も存じておらうな？

アスクレタリオ つとに存じております。陛下のご寿命はいかに抗おうと、明日、十月十四日正午に尽きますると同じく、その直前にそれがしも息絶え遺骸は八つ裂きにされ犬どもに貪り喰われましよう。このこと決してはずれぬ確たる予言でございます。

皇帝 こ奴め、そちの死に様がさようなれば、余が遺骸にも立派な墓なぞ望まぬわ。生殺の権を握る余だぞ、

たかが人ひとりの生死で星運なぞ畏れようや？ このイカサマ野郎を引つ立てい。喉かつ割き、磔柱はりつけに縛り火をつけ汚れた身体を灰にせい、邪魔が入らぬよう兵士にしつつかと見晴らせるのだ。違えたら嚴罰だぞ、命じたとおりに実行せい。

アスクレタリオ 虚しいことよ。それがしの死が予言どおりなれば、後は陛下の番、それがわかれば身震いなさいましように。

皇帝 引きずり出せ、命令どおりにやるのだ。

(親衛隊兵士たちと衛士がアスクレタリオを連れて退場)

余はもはや迷わぬ。驕り高ぶったドミティアは余の尊い愛を踏み躪つたがゆえに死なねばならぬのだ。あの女への想いを断つて余は今、心の勝利を得たぞ。もはや動じることはない。不吉な流星、星占いの虚言、余に諂う側近や奴隷上がりの輩の妬心、身内の者、友垣でさえ抱く余への憎しみ、疑心暗鬼の兵士、市民が余の政まつりごとに刃向かうやもの悪しき予感、かかるものには負けはせぬぞ。良心とやら申す煩さ型も余の内にはおらぬわ。今日までの余の言動、道徳だ神様だとうるさい馬鹿どもが何かとけちをつけおったが、昔のこと

など忘れたわ、過去など余には無きがごとしだ。猛りたつ欲情もみごと抑えたからには、人を虜にする蒼ざめた怖れの意識も断つぞ、いや、怖れなぞ余は知らぬのだ。処刑した奴らの怪しい亡霊、たつた今あの星占いのほざいた、人の知識には受け入れられぬ不気味な予言、かかる亡霊、予言が夢寐にも余を騒がすことなぞないわ。若き日よりただお一人余を守つて下さつた、叔知の神ミネルバが余を見捨てられたりはせぬぞ。寝椅子を持つて参れ。

(召使いたちが寝椅子を運び入れて、退場)
東の間なりと穏やかな微睡みこそ、余を安らぎに誘うものよ。静かな小曲を選んで聴かせてくれ。手控え帳もしばしここに休ませよう。(枕の下に置く) 余が目覚めてこれを開ければ、誰かが永遠に眠ることとなる。

(小曲が奏でられ、皇帝は眠りにおちる)

バルティニウス、ドミティア登場。

ドミティア のう、バルティニウス、あの恐怖の手帳にわたしの名も記されておろうや? いや、取り越し苦労であろう。よもや陛下はなさるまい、いえ、おでき

にはなれぬ。

バルティニウス 確とはわかりかねますが、あなた様が姿を消されたのち、陛下はいたく取り乱され激怒の様で何やら手帳にお記しになりました。記された名は誰かは存じませんが、お顔には躊躇の末のある決意が窺われました。ご決断が何であれ、陛下のご意志は親衛隊の兵士、百人隊長らに伝えられ、やがては、あなた様、それがし、いや、皆の者すべてが知ることとなりましょう。兵士、隊長は陛下のご意志の忠実な実行者ですからな。人の死を記した手帳は、ほれ、お休みの陛下の枕の下にございます。あなた様ならおできになる、あれを掠め取れば陛下のご意志もわかり、抗う手立ても講じられませんが。

ドミティア 自惚れは災いにもなろうがやむを得ぬか。これでは窮屈なお姿、枕をお直しします。陛下、ご無礼を。(手控え帳を手にする) あつ、お動きにならずに!

バルティニウス お手になさいましたか?

ドミティア ほれ、ここに。

皇帝 誰だ!

バルティニウス しいつ、お目覚めです。気づかれぬよ

うにそーっと抜けましよう、のちほどとくとご相談を。

(バルティニウス、ドミティア退場)

不気味な音響。血まみれの剣を握ったユニウス・ラスティクスとバルフィリウス・スラの亡霊登場。亡霊は剣を皇帝の頭上にかざす。皇帝は夢うつつに恐怖を感じミネルバの像に祈ろうとする。亡霊は嘲笑うようにミネルバの像を取りあげる。

皇帝 身の毛もよだつ夢だ、気が狂うぞ！ ミネルバの神よ、何卒ご加護を！ 復讐の悪鬼め、ミネルバ像をどこへやりおったのだ？ 余を起こせ手を貸せい！ 死の恐怖で汗びつしよりだ。流神の悪魔どもを叱責する気力も失せた。余はこのまま、生命を望みを断たれるのか？ いや、余は生きておるぞ！ (狂ったように立ち上がる) おう、生きるのだ、神にも人にも見離された己れ自身をしつかと見定めようぞ。余が内に告発者がおつて、余はまさにそのような者ぞと訴えおる、あの二人の処断に公正を欠いたがゆえに。告発だど？ 余は皇帝ぞ、何を申すか！ もう一度言うてみい。増

長しおつた小面憎いこの反逆者め、そちは死罪ぞ！ ただの反逆者ではないと？ そうか、そちは余が内にあつてもう一人の余に刃向かい、今この場で罪有りとなされたのか。だがな、皇帝を正しく裁ける者があるか？ 皇帝をだぞ。いいか皇帝とはな、皇帝が他人に下した宣告でみずからも裁かれておるのだわ。それが皇帝の宿命なのだからな。ああ、ミネルバ、余が守護神はどこに？ 失せたもうたか？ ならば余の息の根もとまるか。おう、先ほど見たもの、あれは夢ではないまさに現だ、ユニウス・ラスティクス、バルフィリウス・スラ、二人を焼いた灰は海にばらまかれたが、彼奴らは今その無実のゆえに甦り生身の身体で現われおつたぞ、血塗られた剣を余の頭上に振りかざしてな。あの剣は二人の生命を断つた剣だったわ。彼奴らに拉致されたミネルバの神は余にささやかれたかもしれないぬ、「そなたの神をも怖れぬ不遜な所業の科で、大神ジュピターによりミネルバの力は奪われ、もはやそなたを守護すること適わぬ」と。ああ、そのとおりだわ。

(稲妻が光り雷鳴が轟く)

ジュピターの雷がその証しか、稲妻は王者の樹、月桂樹を避けて通ろうが、天空に煌めいたこの光こそ神の

お怒りの紋章なのだ。

親衛隊の兵士三名登場。

何じゃ、余を処刑するため参ったか。

親衛隊の兵士1 陛下への忠誠、兵の信念からして、至尊の陛下に指一本触れるものではございませぬ。

親衛隊の兵士2 ご寛大な慈悲をこそ乞ひ願いまする。

親衛隊の兵士3 ご命令を実行できずに処分されるも、しごく当然と弁えおります。

親衛隊兵士1 我々の不注意、怠慢でご命令を果たせなかつたことございませぬ。神々の怒りが下りましよう
と、兵として陛下のお言葉に逆らうことができませぬ。

皇帝 報告せい、神々の怒りが下るとは、何があつた。
耳を貸すぞ、だが、不遜な言は許さぬ。

親衛隊兵士1 簡略にご報告いたします。陛下の尊きお言葉にて死の宣告を賜りました星占師アスクレタリオ
めを、速やかに刑に処しました。

皇帝 そうか。
親衛隊兵士1 喉を割き脚は括り手は背にて縛めた死体

を、罵声を浴びせて市外の野に引いて参りました。燃えやすく火勢がつゆるようにと油、硫黄などを塗りつけた古木の礎柱をたて、死体はそれに結わえました。燃えるに易い礎柱が炎に包まれたとみるや、剛毅な兵も心底驚愕いたしました。突如、一条の稲妻が雲間を走り猛々しく地上に迫り、稲妻以外には地上の光と熱は許さぬかのように、瞬時に業火を消し去りました。再び火をつけようといたしますと、肝を冷やす雷鳴が轟き、その音響たるや、人間どもにお怒りになった天上の神ジュピターが、密かにこの世の破滅を決意なすつたかのような凄まじさ。轟音について、ノアの洪水を引き起こした大暴風雨もかくやと思われる、いや、言葉では言い尽せませぬ、車軸を流す豪雨となつたのです。ナイル河の急流とてあの激しく流れる雨水には及びませぬ。海の怪物、人食い鯨が海の水を飲込んで空中に吹き上げる潮の勢いは大変なもので、船をも吹き飛ばし、雪崩のごとく海面に落下するそうでございますが、あの雨はその鯨の潮の恐ろしさと同じかと思われました。ここまでが序幕、肝がつぶれましたのはこれからです。かのイカサマ師の死体を灰にする努力が無に帰しますや、ローマの犬という犬が餓狼さな

がらに牙をむき吠えたて、こちらに向って来るではございませぬか。何千匹かは殺しましたが、生き残りの数匹は磔柱に駆けあがり、鋭い牙で死体に襲いかかったのです。

皇帝 犬は死体を裂いたか？

親衛隊の兵士1 死体を噛み裂き貪り喰らいました。

皇帝 彼奴の申したとおりだ、さすれば予言は正しい、余は亡き者、生者にはあらずか。おお、余が忠良な兵士よ、皇帝は別れを告げねばならぬ！ 余が命運いささかの猶予も与えられぬこと、お前たちに詫びるとしよろぞ。今際いまわの時は刻一刻迫つてきおるわ。余は本日、正午に死ぬのだ。お前たち、その時こそ余が生き姿を拜む最後ぞ。

親衛隊の兵士1 大神ジュピター、陛下のご運を変えて下され！ そう、陛下のお生命はこの剣に宿るもの、我らがお守りいたします。

皇帝 いや、守れるものではないわ。余の寿命は天で定められたもの、地上のいかなる力によっても変えることは適わぬ。矜持ある者ののみが皇帝の盛衰を見守るのだ。皇帝は麾下の軍団を有し、生死を常に心にとめ、両の腕に地球を抱きおるかのようだ、神と呼ばれるこ

ともあろう。だが皇帝は、その僭越が仇となって、平民よりはるか下の惨状に陥る場合もあるのだわ。余は余みずからの重みで沈みゆく。

親衛隊の兵士1 自棄になられまするな。いつまでもお側におります。

親衛隊の兵士2 謀反の恐れがありますなら、陛下の護衛に兵士の数を増やします。

皇帝 余の生命は救えぬ。余を裁かれる神々は余の権力を嫉み腹をたて、余を打ちのめさんと謀っておられるのだ。

親衛隊の兵士1 神々を宥め遊ばしてはいかが？

皇帝 無駄なことだわ。余に赦免の望みはない。だが、ああ、本日正午、この生命取りの時刻さえ逃れられれば、余を絶望に追いやる恐怖も消え失せるのだが。

親衛隊の兵士1 得心いたしました。我ら、お供つかまつります。ローマを骨壺とし、共に骨を埋めましょうぞ。

皇帝 よくぞ申した。いささか慰む心地だ。おう、死は苦難の果てる時でもある。

(一同退場)

第二場

パルティニウス、ドミティア、ユリア、カエニス、ドミティア、ステイファノス、セージェウス、エンテリリウス登場。

パルティニウス このままでは皆、罪をきせられるのはご承知のはず、逃れる術はありません。殺るか殺られるかですぞ。

ステイファノス 今すぐにもご決断を。一瞬の躊躇が仇となりましょう。

ドミティア わたしが男だったら手を下すのに！

ドミティア 城攻めとなったらわたしも、身の丈は小さくともこのお方に負けぬ心の丈で、高い所まで攻め昇りましょう。

ステイファノス 何の、突撃はおまかせ願います。要は護衛の兵士を陛下から引き離すこと。陛下お一人をこちらにお連れになれば正義の刃を見舞い、暴君より自由を取り戻した名誉はこのステイファノスのものとなります。

セージェイウス 後世に残る名誉の独り占めはいたさせ

ぬ。

エンテリリウス こちらも一役買ひましょう。

パルティニウス お覚悟はよろしいな、くれぐれもご油断なく。陛下をお連れする名案がある、のるかそるか命懸けでやってみます。陛下がいらしたら即座に——ステイファノス 殺る。死んだ犬は噛みつきはせぬ。

パルティニウス では、一か八かの勝負を。

(パルティニウス退場。他の者は舞台の端による)

皇帝、親衛隊の兵士ら登場。

皇帝 時の経つの遅いことよ！ 危機に臨んだ者には瞬時の遅滞も恐ろしいわ。時の翼に強くはばたく大きな羽根を足したいものよ、いや、日輪に意のままに命じられたらもう、余が恐れる刻限が速やかに過ぎ去るよう、日輪が跨がる軍馬に天上の東の丘を一気に駆け抜けるべくきつく鞭を加えよと。ああ、時を刻む針を午の刻に合わせ、恐れから干上がった血脈、動脈に暖かな血潮を溢れんばかりに通わせたいものよ。余の顔色はどうじゃ？ 余の周りに死神は見えぬか？

親衛隊の兵士 死神なぞ意に介されませぬ。危険はご

ざりませぬ。宸襟しんせきを煩わした悪しき兆候などは天然自然のありふれた現象でございます。これらのこと、陛下はご自身に関りありと仰せられますが、陛下にはいささかの関りもなく生じましたことと拝察下されませ。

皇帝 良いことを聞くものじゃ、いかにも、猛き兵つわものの言よのう。余は氣力もわき身内に力漲るを感じるぞ。運命の刻は近づくが余には護衛の精銳ありということだな。予言なぞ消え失せよ！ 余にも自信が沸いてきたわ、予言は虚言、砂上の樓閣！

親衛隊の兵士 1 そのとおりでございます。それでこそ陛下のお言葉かと。

皇帝 兵士の屯所に赴き士氣を高めようぞ、給与、褒賞の金も遣わそう、誰か——いや、待て。

バルティニウス登場。

バルティニウス 皇帝陛下の勲業いさかを祈念いたします！

皇帝 何やら嬉しそうだの。

バルティニウス 喜ばしき言上の次第、恐悦至極に存じます。陛下玉体につきましてはやご懸念には及びま

せぬ。お生命危うしとの魔の刻限は過ぎております。皇帝 そうであつたか？

バルティニウス 正午はつとに過ぎました。不安の時を長引かせました時計係の役人は死罪にして然るべきかと。ただ今到着の使者、シリアへの遠征の軍は勝利をおさめ、陛下の領土はまたもや大きく拡大との吉報をもたらしました。使者の件、余人は未だ知りませぬ。まずは陛下一人で吉報の逐一を嘆賞され、しかる後に元老院に報告遊ばされるが宜しいかと。議員諸侯も陛下のご恩、ご武運にあらためて感じ入ることでございましょう。

皇帝 怖れの気持ちなど跡形ものう消え去つたわ。バルティニウス、案内せい。

親衛隊の兵士 1 お供つかまつります。

皇帝 無用だわ。勝ち戦に護衛はいらぬ、差し出がましいまねはするでない。

(皇帝、バルティニウス退場)

親衛隊の兵士 2 あらぬ望みは人を盲目にしおる。魔の時刻はこれからだぞ！

親衛隊の兵士 1 我々の任務は果たさねばならぬ、成り行きを見守るのだ。

ドミティア 陛下の足音がします。さあ、油断なく。
(退場)

皇帝、パルティニウス登場。

皇帝 どこだ、パルティニウス、吉報をもたらした使者はどこにおる？

ステイファノス ドアを閉ざせ。——使者はこちらに、死神のお使いが。

皇帝 何と、謀りおったか？

ドミティア さあ、暴君、お覚悟！

皇帝 ドミティア、そなたまでが！

パルティニウス この手帳、ご覧あれ。

皇帝 そうか、では余もこれまでだ。だが、武器はなくとも簡単にやられはせぬぞ。

(ステイファノスを投げ飛ばす)

ステイファノス 助けてくれ！

エンテイリウス こうだ、こうやるのだ！

セジエイウス 地獄に墜ちろ、永遠に。

皇帝 最後だ、惨めな最後だ。
(二人は皇帝を刺す)
(倒れて息絶える)

パルティニウス 父の敵。

ドミティア パリスの仇。

ユリア 近親相姦の罪。

ドミティラ ドミティラ虐待の罰。

親衛隊の兵士1 (内部で) ドアを蹴破れ！
(四人はそれぞれ皇帝を刺す)

親衛隊の兵士ら登場。

ああ、無残な！ 何たることを。

パルティニウス ローマが感謝することだ。

ステイファノス 化物を退治したまで。

親衛隊の兵士1 暴君であろうが、いやしくもローマの皇帝であらせられた。かかる弑逆、陛下を継がれる方はきつと復讐なさいませぬ。——(ドミティアに)

陛下の忠良な兵士の我らにはあなたのような魔女、許すことできません。不義の科で皇后の座を逐われたあなたこそここに至る災いすべてのもと、無罪釈放とは参りませぬから。このお方を逮捕しろ、ご自分を裁いていただくのだ。皆様方のお取り調べは元老院のお歴々がなさり、慎重なお裁きのちに判決が下ります

る。陛下の遺骸を担え。陛下は死をもつて己れの狂気の償いをなされたのだ。かかる違いがございましょう——良き王者は死してなお悼まれ、悪しき君主、ことわり理らず我意に憑かれし皇帝は同情ひかぬ没落をただ哀れまれるだけ。さような王、君主のお弔いには、心正しき人々の涙流されることありはしませぬ。

(一同退場)

ファンファールの吹奏。

終わり

作者について

一五八三年に生まれ一六四〇年に亡くなったマッシンジャーは、広義のエリザベス朝演劇の最後期を代表する劇作家の一人である。一六二五年を境目にするジェイムズ時代(の後期)とチャールズ時代、この二つの王朝の時代にまたがって、悲劇、喜劇、悲喜劇と劇のいくつも

のジャンルに多様な作品を書いたマッシンジャーは、彼の生きた時代の社会的な風潮と観客の嗜好の推移に敏感で、一六二一年以降は主として私設劇場 (private theatre) の観客を対象にして、劇のジャンル・主題・素材・技法を作品ごとに様ざまに変化させながら、観客の意表をつくプロット構成の秀抜さと詩的な修辭に彩られた流麗な台詞とで、常に観客を魅了する劇作の技法を修得していた。だが一方では、マッシンジャーの作品には保守的な知識階級の価値観からの秩序への強い希求があり、変遷する時代を越えた、人間の本質に関わる普遍的なモラルが教訓として提示されることが多いのも周知の事実であった。多種多様な素材をもとに高度な職人芸ともいえる技工をこらした劇作法で、興趣にあふれ変化に富む劇をつくりあげ観客を存分に楽しませながら、マッシンジャーは彼の道德観が反映したある種の観念的な劇の世界をも創造しようとする劇作家でもあった。

マッシンジャーとはほ同年代のジャコビアン演劇の代表的な劇作家、ミドルトン(Thomas Middleton)、フレッチャー(John Fletcher)、ボーモント(Francis Beaumont)が信奉する演劇の理念と劇作の方法論はそれぞれ独自のものであっても、彼らは多様で豊饒なジャコビアン・ド

ラマの形成に参加した劇作家たちであり、彼らの作品はジャコビアン演劇という背景とジェイムズ時代という時代(精神)と切り離しては考えられぬものである。これに対し、マッシンジャーが約十年のフレッチャーとの共作時代をへて、単独で劇作を始めたのは一六二〇年であり、彼自身も四十歳近くジャコビアン演劇も終末に向かう頃である。ジャコビアン演劇の末期という外的な状況と、ジャコビアン演劇の理念・方法論に客観的に醒めた意識で対処した劇作家の内部の認識とで、マッシンジャーは確かに遅れてきたジャコビアン演劇の劇作家ではあったが、このことは、前記三名の劇作家とは対照的にマッシンジャーをジャコビアン演劇という一つの時代の特殊性だけでは判定しえぬ劇作家にしていよう。

また、マッシンジャーは一六二五年以降の作品でも、チャールズ時代に特有の問題意識・美意識に依つて作品を著した、フォード(John Ford)やシャーリー(James Shirley)等のキャロライン演劇の劇作家たちとも本質的に異なる劇作家であることを如実に示している。マッシンジャーは、ある特定の時代が有する特殊性を超越した、一種の脱時代的とも考えられる劇作家として、エリザベス朝演劇の最後期に独自の地位を占め異彩を放つ劇作家

であろう。

ガレット(Martin Garret)編の『マッシンジャー、批評の遺産』(Mssinger: the Critical Heritage, 1991)にはマッシンジャーが活躍した一六二〇年代から十九世紀の終わりまでの、マッシンジャーに関する評言、批評の主なものが収録してあるが、この書をもて他のエリザベス朝演劇の劇作家と比較してマッシンジャーは、十九世紀の前半を頂点にしてそれぞれの時代に、興味の対象は異なっている、関心を寄せられることの多い劇作家であったことがわかる。しかし、二十世紀では二十年から七十年に至まで、エリザベス朝演劇の劇作家の多くが再評価され新たな脚光を浴びるようになったのに反して、マッシンジャーは十九世紀に与えられた古い評価のままにやや忘れられた存在になってはいなかったであろうか。

一九二〇年にエリオット(T. S. Eliot)がその『マッシンジャー論』(Philip Massinger, The Sacred Wood, 1920)で「感受性の崩壊」の予兆を示す劇作家の一人としてマッシンジャーを厳しく裁断して以来やく半世紀の間、マッシンジャーに対する新しい再評価の機運は熟するに至っていないのである。

もちろん、この間にも、変動期の社会に現われる新旧

の典型的葛藤を劇化したものとして、マッシンジャーの「社会的」な喜劇を高く評価したL・C・ナイツ(L. C. Knights)の『ジョンソン時代の演劇と社会』(*Drama and Society in the Age of Jonson, 1937*)、マッシンジャーの伝記上の事実を詳細に伝えてくれたダン(T. A. Dunn)の『マッシンジャー、人間と劇作家』(*Philip Massinger: The Man and the Playright, 1957*)等の研究書があり、また一九三四年刊のカーク(Rudolph Kirk)編の『町人奥様』(*The City Madam*) はじめ何冊かの新しい注釈本は出版されてはいるのだが――

マッシンジャーの作品の有する多様性が理解され、彼の劇作品が現代の我々の視点からなされる諸種の分析、研究の対象となり、新しいマッシンジャーの世界が広く深く探求されるようになった一つのきっかけは、一九七六年、エドワーズ(Philip Edwards)とギブスン(Colin Gibson)共編の『マッシンジャー全集』(*The Plays and Poems of Philip Massinger*) が出版されたことであつたと思われる。

『マッシンジャー全集』出版を機に高まつてきたマッシンジャー再評価の具体的な成果は、一九八四年刊行のハワード(Douglas Howard)編『フィリップ・マッシン

ジャー、再評価論集』(*Philip Massinger: A Critical Reassessment*) に所載の諸論文にみることもできる。ここに収められた九編のマッシンジャーに対する新しい論者からも、論者のマッシンジャーに関する興味・関心・研究の対象がマッシンジャーの作品が含む問題の多方面にわたっているのが理解できる。とりわけ、「モラル」・「詩的言語と演劇的言語」・「悲劇の質」・「共作」・「時代と作者の関わり合い」・「マッシンジャー喜劇の特殊性」等の内容が新しい問題意識で論じられており、興味深い。

また、一九八〇年代に、より明らかになつた(主として)チャールズ時代の社会、文化、政治の状況と、当時の種々の演劇に関する事実を理解したうえで、マッシンジャーの全体像をとらえ、マッシンジャー劇の社会性、芸術性、倫理性を具体的に検証しようとするクラーク(Dra Clark)の新しい研究書『フィリップ・マッシンジャーの道徳的な芸術』(*The Moral Art of Philip Massinger*) も一九九六年に刊行されており、マッシンジャーの再評価は今なお進行中である。

『ローマの俳優』について

一六二六年に「国王一座」によって初演された『ローマの俳優』(The Roman Actor) はマッシンジャーが劇作家として最も円熟した時期に書かれた作品であり、『ミラノ侯爵』(The Duke of Milan, 1621)と並んで、彼の悲劇の代表作である。古代ローマの史家スエトニウス(Gaius Suetonius Tranquillus)の『皇帝列記』(De vita caesarum)にあるドミティアヌス帝伝に材を得たこの作品は、エリザベス朝演劇の一つの有力なジャンルであった「ローマ劇」(Roman Plays)の範疇に入る劇であり、この劇の主要プロットを構成する人物と事件はほぼ史実そのままを踏襲している。だが、『ローマの俳優』の登場人物には過去の歴史の実在人物の実像から作者のアイデアをへて作中人物に昇華する過程で作者の主観が色濃く投影されていることがわかる。少々大げさな言い方をすれば、過去の歴史と書かれた作品との非連続の連続、虚構の世界でのリアリティのある人物の創造といった、芸術の最も基本となる問題が、『ローマの俳優』ではどのように達成されているのかを考察するのも興味深いこ

とである。

『ローマの俳優』は、政治の陰謀、欲望と邪恋、陰湿な嫉妬、これらが渦巻くドミティアヌス帝の宮廷を背景にして、多彩な人物が登場し、華麗な言辞に彩られた一見華やかな劇行為が最後までつづき、観る者を舞台に陶酔させる第一級のメロドラマとして鑑賞することも充分に可能であり、一六二六年初演当時、「ブラック・フライアーズ」劇場の観客にこの劇が歓迎された理由が『ローマの俳優』がもつ観客を楽しませる娛樂性に富むメロドラマの外形であったことも容易に想像されることである。だが、エリザベス朝の文学理念の一つ、「教えかつ楽しませる」ことの実践家でもあるマッシンジャーは、『ローマの俳優』でもメロドラマの外形をとりながらもこの作品に劇の主題と構造の両面にマッシンジャーらしい考えを示し、技工をこらした手法で劇を作りあげている。一つは政治指導者の在り方をめぐる「モラル」の問題(劇の主題)であり、一つは虚構と真実に関わるメタドラマの問題(劇の構造)である。

「モラル」の問題からこの劇を見るならば、暴虐の限りを尽くす皇帝が自らが虐げた者たちの反逆を受け暗殺によって悲惨な死をとげる結末から明らかのように、一

種の因果応報の形をとって、政治指導者の在り方を一人の反面教師となる皇帝の存在をおして明確に示している。特に、劇中に現われるストア派の哲学を信奉して処刑される人物たちの台詞に作者の道德観は如実に表されていよう。しかしながら、復讐悲劇の伝統をひく劇のプロットと登場人物のモラルに関する発言が遊離している嫌いがあり、劇行為とは別の次元で作者の道德観が開陳されているだけであると厳しく批判することもできよう。また、創作年代はやや遡るが「ローマ劇」の代表的な作品であり、当然マツシンジャーも意識したであろう、シェイクスピア(William Shakespeare)の『ジュリアス・シーザー』(Julius Caesar)と比較した場合、同じくローマの過去の歴史に基づき政治指導者の暗殺を素材にしながら、政治の状況、主人公の因果応報の死の単なる絵解きではなく、一人の政治家の死をおして人間存在の奥底を問う真の悲劇を創造している『ジュリアス・シーザー』に対して、『ローマの俳優』は悲劇としての完成度ははるかに低いと言わざるを得ないし、具体的に以下の諸点は『ローマの俳優』の悲劇としてのマイナス点になつていよう。

(1) 皇帝の内面での美を愛する人間性と権力に固執

する権勢欲との矛盾、美を愛するがゆえに非人間的にならざる得ないという逆説が劇行動をおしてドラマタイズされていないこと、(2) 登場人物が自己分裂、自己の矛盾についての認識を欠いていること、もしくは探求の意志がないこと、(3) 皇帝への反逆が反逆者たちの個人的な私意の段階にとどまり、真の秩序回復の希求にまで高められておらず、したがって皇帝暗殺に悲劇に必須のカタルシスが生じぬこと。

『ローマの俳優』がエリザベス朝演劇の多くの作品のなかでユニークな劇として存在価値があるのは、モラルの教示、悲劇の創造ということよりも、メタドラマの可能性の問題をこの作品が提起しているからであろう、と私は理解する。

『ローマの俳優』の主要プロットには、皇帝、皇后、俳優パリスの愛憎が複雑微妙に絡み合う人間関係が示され、三者の奇妙な結びつきはパリスの演技力に皇后の心が奪われたのを知った皇帝がパリスに主人を裏切る芝居を演じさせ、みずから芝居で一役を演じて舞台でパリスを刺殺することで破局となる。ここには、政治と愛と芸術の関係と共に、虚構と真実の微妙な均衡という演劇の根源に関わる問題が訴えられている。虚構の世界と現実

の世界を生きねばならぬ宿命をもつ俳優を主役にすることで、虚構と真実という主題は観る者に強く迫ってくるのである。また、『ローマの俳優』では演劇そのものが

重要な考察の対象になっており、演劇とは何かが劇のなかで問われることになる。演劇は観客の劣情を煽り人間を墮落させるものであると糾弾されたパリスは、演劇の存在理由、演劇の有用性を説き議員諸侯に激しく反論する（一幕二場）。演劇という概念が『ローマの俳優』のライトモチーフとなつて浮上してくるのがわかるし、パリスの力説する演劇の有用性という仮説がどのように劇中で実証されていくか、という視点からこの劇を考察することもできよう。さらに、「しみつたれの直し方」（二幕一場）、「イフィスとアナクスレイト」（三幕二場）、「不実な召使い」（四幕二場）の三つの劇中劇が単に劇行為に付随するエピソードではなくて、劇の主題と劇全体のプロットの展開に有機的に作用するよう精妙に仕組まれている。エリザベス朝演劇のドラマツゥルギーでは、劇中劇という技法は演劇の舞台という虚構の中にさらに虚構をつくりだすことで二重の虚構の世界を設定し、観客の舞台に対する意識を複雑化させることで舞台と観客の間の緊張感を強め、「虚」と「実」の織り成す相乗作

用の効果を高めることを意図しているのだが、『ローマの俳優』はこのメタドラマ性をきわめて高度に具現化している劇と考えて良いであろう。

〔本稿の「作者について」の部分は、筆者訳『町人奥様』（早稲田大学出版部刊、一九九六年）に併録の「マツシンジャーの『町人奥様』」に依拠したものであることをお断りしておきます〕